



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2020年 1月号

「メリー・クリスマス & ハッピー・ニューイヤー」

牧師・園長 長村亮介

教会の新年はクリスマスの光りの中にあります。教会の暦では、一月六日は「公現日」と言って、東方の占星術の学者が、幼子の主イエスを礼拝した記念日です。ただ日本の教会には、あまり公現日が伝わらなくて、東方の学者たちの礼拝は、クリスマスのページェントの中で、異邦人に対しても救い主が顕れたことを伝える大切な出来事になっています。

さて、東方の占星術の学者たちを導いた「星」が何だったのかについて、以下のような随想をご紹介します。

導きの星

古代の人々にとっては、星が新しい王の誕生を告げるという考えは、けっして奇異の念を起こさせるものではありませんでした。ヘレニズム時代の文献も、しばしば、そうした異象について報告しています。紀元前六年ないし七年に星座の中で三つの星（火星、木星、土星）が異常な接近をするのが観察されました。このとき、バビロンあるいはペルシアの占星家たちは、大いに驚いたことでしょう。

むろん、こうした事実は、ただちに福音書記者マタイの伝える物語の歴史的信憑性を証明するものではありません。しかし、そうした星座の配置によって告知された王を訪ねて『占星術の学者たち』が『東の方から』（マタイ二・一）エルサレムにやって来るという物語は、マタイ福音書の最初の読者たちにとって、けっして奇異なものには映らなかつたことでしょう。

もつとも『ベツレヘムの星』が何だったか、ケプラ以来天文学的な研究も、けっして確定できないままです。マタイによれば、この星は、まことに驚くべき特別の星だったことがわかります。それは、あきらかに天文学的法則に反する動きを示したのですから。ベツレヘムへの道において『先だつて進み』『導きの星』となったばかりか、ついには『幼子のいる場所に止ま』（マタイ二・九）り、目じるしの星となっています。『ベツレヘムの星 聖書的象徴による黙想』 宮田光男 著

東京の夜空は薄明るくて、満天の星々に思いを馳せるには、少々力不足かも知れません。しかし、夜に世田谷公園に行つて空を見上げると、それでも輝いている星が、空いっぱい広がっているのを見ることが出来ます。その輝きは、確かに心細いものかも知れませんが、そうではなくて、それでも輝いていることが大切なのではないかと、足早に通り返ぎようとしながら、わたしはふつと思いました。占星術は偶像崇拜になるのでキリスト教では信じませんが、あのポツリとしか見えない光りが、実は遠い昔に光つたものであること。ひよつとしたら人間を神さまが創造される遙か以前に造られた光りの瞬きを今見ているのかも知れないと思うと、その光りに、今の時に照らされている自分の存在が、とても不思議に思われました。今はまだ見えない星の光りが、既に私たちに向かつているのを感じました。未来は既に在り、そこには神さまのご計画も在るのです。たとえどんなに小さな光りであっても、きつと、神さまの平和があるに違いありません。

Ω

平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園
2020年 1月号